日本獣医教育の祖　時重初熊博士について

会員　河野　茂

一　墓誌銘

徳山市戸田の戸田山鳶ケ迫墓地の時重初熊博士の墓石に刻された墓誌銘は次のとおりである。

時重初熊博士墓誌銘

東京帝國大學農科大學教授、兼農商務省獣疫調査所長、正四位勲三等獣醫學博士、時重初熊長逝。尊人屬予墓銘。因拠行狀叙曰、君山口縣都濃郡戸田村人。山口藩士族時重音次郎長男。母坂田氏。安政六年十一月廿八日生於家。長有志于獣醫之學。明治十六年負笈游東京。十八年以優等成績卒業駒場農學校①尋爲其助教授、經東京農林學校教授任農科大學助救授、叙高等官七等従七位。三十一年有命留學獨國。此間爲委員列巴亜甸②萬國獣醫會議。三年而帰。受獣醫學博士學位、任農科大學教授。爲中央衛生會臨時委員兼任農商務技師、監督獣疫調査事業。歴叙高等官二等従四位勲三等、賜瑞寶章、双光旭日章等。大正二年四月罹病。陞叙正四位、賜旭日中綬章。是月十九日竟不起。享年五十有五。葬于先妣③墓側。君資性嚴毅、品行方正、倹素自持精力絶倫。深究病理常能愛育子弟。方其研究病理也、殆忘寝食、不究其蘊奥則不已矣。以是其所研究之事項亦極博渉。曰、予防接種法。曰、病原體。曰、免疫血清。曰、何。曰、何。不遑枚挙。貢献獣醫畜産。功績之偉大、内外所具瞻也。如君實可謂斯界之泰斗矣。君余事賦詩、有馬乳軒、青軒等號。配④原田氏。生一男一女。銘曰

⑤ 卓爾風骨、凛乎精神。夙夜研鑽、闡微探眞。
萬民浴恵、六蓄回春。名轟寰宇、華扁後身。
誰不腕惜、呼國之珍。

大正三年五月三十日
正四位勲三等　獣醫學博士　勝島仙之介撰

H. Fottichage

注

① 駒場農学校　東京大学農科大学の前身
② 巴亜甸萬国獣医会議　ドイツ国バーデンで開催された萬国獣医会議
③ 先妣　なくなった母
④ 配　妻
⑤ 詩の意味
（博士は）すぐれたる風采、きびしく引きしまった精神（を持った人で）朝早くから夜遅くまで研鑽し、かくれたる微妙なものをひらき明らかにし、真理を探究された。万民はその恩恵に浴し、多くの家蓄類も病がなおり元気になった。（蓄―畜、六蓄とは、六つの家畜即ち牛・馬・羊・鶏・犬・豚）その名は天下にとどろき、かの中国古代の名医扁鵲の生れ代りともいうべき人であった。（華扁は中国の扁鵲の意、春秋戦国時代の名医）（その死を聞き）誰嘆き惜しまない者があろうか。
ああー、めったにない国の宝とも言う可き人だった。

二　時重初熊先生の生涯

一においてその墓誌銘を紹介した日本獣医学の祖時重初熊博士については、古くは昭和三年一一月二〇日発行の、『戸田村教育史』（戸田尋常高等小学校校長田中秀吉編纂発行）があり、近くは、昭和五四年発行『山口県地方史研究』第四一号に、「日本獣医学教育の祖時重初熊先生」と題する岸浩氏の発表がある。しかし尚まだ一般に知られていないように思われる。依って、墓誌銘と並んで、博士の生涯について、主として『戸田村教育史』（時重初熊先生伝）によって紹介したいとおもう。同書も現在は所蔵者も少数できこう書になっており、ここに紹介するのも意味なしとしないだろう。

先生は士族、時重音次郎の長男として安政六年（一八五九）一一月二八日、都濃郡戸田村に出生される。幼少の頃から学を好み同村の儒学者、山田恭蔵先生につき漢学を学び、明治五年（一八七二）三月、一四才で山口文学寮に入り漢学幷に高等の歴史学、理化学を修める。明治九年（一八七六）一八才にして小学校教員養成所に入学、六カ月で優等で卒業。明治一〇年五月二四日山口師範学校下等小学師範科卒業。同年同日、第九大区、宮市松崎小学校訓導を申附けられる。月給拾六円。明治一一年（一八七八）二月一二日、松崎小学校三代の校長に昇格する。向学の情禁ずることが出来ず勉強のため東京に行かれて、明治一三年六月二五日、駒場農学校植物病理学科に入学、明治一八年（一八八五）七月七日駒場農学校獣医学科を首席で卒業し、獣医学士の学位を受領、以来農科大学の教職を歴任されている。又農商務省、宮内省、内閣、文部省などの要職を兼務されている。明治三一年（一八九八）より三カ年余、獣医学研究のためドイツに留学せられて、博士キット、ボリンゲル等の碩学につき研究せられて明治三二年（一八九九）三月二七日獣医学博士として第一号の学位を受領せられる。帰朝後も熱心に研究を重ねて幾多の子弟を指導される。

その業績の大要をあげれば、日本馬匹の仮性皮疽及綿羊腸結節病原の発見・牛疾血清の創製・ヒムシ病・結核病・豚疫・腺疫・ボルナ病・加奈陀馬痘プラキシー・伝染性貧血・ダニ熱等の研究にして日本獣医学の進歩発展に貢献せられた功績は特に著大であって、その名声を海外にまで広めたのは先生の研鑽の賜である。

農商務省の技師を兼任して獣疫調査所長になり、各種の予防液、血清、診断薬の製造及病不明な伝染病の研究指導監督して着々と偉大な効果をあげておられる。その他中央衛生会及臨時馬匹調査会の委員となられて貢献されている。凡そ日本の獣疫防遏策並に病理不明な疾病の鑑定は直接間

接先生の力によらないものはない。真に畜産界の恩人で斯界の人が敬慕したのである。

先生は資性謹厳高潔でその教えは、こんせつ丁寧で学生は深く敬慕していた。からだの弱体質にもかゝわらず勤勉で緻密で奉公の義務を重んじて学術の研究をもって生涯の務めとされて、二六時中授業時間の外は常に研究室で研究され、三十年一日の如くその精力の絶倫なことは匹敵する者が居なかったという。そうして先生は近頃の社会の通弊である浮華虚栄をきらわれ、万事質素を旨とし人と交わるに篤実で、一度先生に面接した者はその人格に浴して、その高風をおしたいしたという。先生は文章がうまく平素は余り話されないが、一旦議論を進め真理を論ずる時は、侵すべからざるものがあったという。

不幸にして病気になられ大正二年（一九一三）四月一九日死亡される。誠に痛惜のきわみである。しかし先生の業績は永く世を碑益することでしょう。病気になっても数日は病気をこらえて、駒場①及西ケ原②に出勤されて、研究に従事されたことは、世にまれなことで驚嘆する所で、真に学界の偉人と言うべき人である。

博士は獣医学博士の第一号で東大獣医学部の初代の学部長である。東大教授という地位と、戸田村民とは余りにも縁遠かったことと、不運にして子孫が病弱のために、絶家となったので戸田でも余り知られていない。古老達の思いでに残る映像は、大正二年五月二五日、光西寺で行なわれた壮大な葬儀の模様と勅使として馬淵県知事が差遣わされたことである。

戒名　遍照院殿釈篤学浄光大居士

注　①東京帝大農学部所在地

②農商務省獣疫調査所所在地

（昭和六二年九月一二日例会発表）